

発刊の辞

原田 稔

古来、「諸経の王」とよばれてきた法華経は、長期にわたりアジアの諸民族の心に、生命の尊厳、宇宙・自然との共生、慈悲と平和、人類共存の精神を養い、多彩な文化の華を咲かせてきた。

中国社会科学院アジア太平洋研究所の正研究員（教授）であった故蔣忠新氏は、現存する梵文『法華経』写本の特徴として、①数量が最も多いこと、②発見地が最も多く、それらがカバーする地域が最も広大であること、③写本の間における、言語、構成及び文章の長さ等の面での違いが最も複雑であること、④写本の書写された期間が最も長く続いていることなど、と述べている。（『東洋学術研究』第36巻第2号）

以上の分析の上で、蔣忠新氏は「これらの特徴を総合的に研究すれば、我々は確かな結論を導き出すことができます。すなわち、『法華経』はインド仏教史上において最も広範囲にわたり、長きにわたって影響を及ぼした仏教經典であるということであります」と結論づけた。（同上）

その法華経思想の淵源や成立の歴史を知るために不可欠なのが「原典研究」であり、写本研究は、その最も基礎となる作業である。しかしながら、貴重な写本は、各国の研究機関で厳重に保管されており、直接目にし、比較・対照して研究することは困難であった。

池田大作創価学会名誉会長は、法華経に内在する精神を「宇宙的ヒューマニズム」と呼び、その法華経の精神を基調として、平和・文化・教育の運動を世界に展開。人類が直面する地球規模の諸問題について、世界の識者と対話を重ねてきた。法華経の普遍的なメッセージは、名誉会長の対話の底流をなすものである。また、各国の識者、学者、研究機関から写本の複製版やマイクロフィルムなどの貴重資料が贈られることも少なくなかった。

1994年、創価学会は、名誉会長の提案を受け、世界の仏教研究の進展に寄与したいとの構想のもと、サンスクリットなどの学術的価値の高い法華経写本原典を「写真版」と「ローマ字版」の形で発刊するプロジェクト委員会を設立した。その研究と編纂を東洋哲学研究所に委嘱。国内外の学術機関や専門家の協力を得て、第1期、第2期計画事業を遂行し、既に13点の出版物を上梓することができた。これまでに刊行されたものは以下の通りである。

<法華経写本第1期出版事業>

- 『旅順博物館所蔵 梵文法華経断簡一写真版及びローマ字版』1997年
『ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No.4-21) 一写真版』1998年
『ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No.4-21) 一ローマ字版 1』
2001年
『ネパール国立公文書館所蔵 梵文法華経写本 (No.4-21) 一ローマ字版 2』
2004年
『カードリク出土 梵文法華経写本断簡』2000年
『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華経写本 (Add.1682およびAdd. 1683) 一
写真版』2002年
『東京大学総合図書館所蔵 梵文法華経写本 (No.414) 一ローマ字版』2003年
『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵 西夏文
「妙法蓮華経」一写真版 (鳩摩羅什訳対照)』2005年

<法華経写本第2期出版事業>

- 『英国・アイルランド王立アジア協会所蔵 梵文法華経写本 (No.6) 一ローマ
字版』2007年
『パリ・アジア協会所蔵 梵文法華経写本 (No.2) 一ローマ字版』2008年
『大英図書館所蔵 梵文法華経写本 (Or.2204) 一写真版』2009年
『ケンブリッジ大学図書館所蔵 梵文法華経写本 (Add.1684) 一ローマ字版』
2010年
『大英図書館所蔵 梵文法華経写本 (Or.2204) 一ローマ字版』2011年

第1期においては、法華経写本の主要3系統のうち、鳩摩羅什の漢訳に近い「中央アジア系写本」、および最も枢要な法華経原典である「ネパール系写本」の

代表的写本に、世界初の「西夏文法華經」を加え、計8点の研究・出版を行った。

第2期では、「ケルン・南條本」に代わり得る「ネパール系梵文法華經校訂本」ともいべきテキスト制作への長期展望を視野に、そのために不可欠な良質のネパール系写本4種・5点の研究・出版を行った。

上述した法華經写本研究・出版事業は、原典研究への貢献として、国内外の仏教学者、文献学者、専門家などから高い評価を得ることとなった。

この度、新たに第3期の法華經写本出版事業をスタートさせ、インド国立公文書館、創価学会、東洋哲学研究所の共同事業として、待望久しかったギルギット写本の精巧なカラー写真版刊行の運びとなったことは、誠に喜びに堪えない。

このギルギット系写本の発刊により、「ネパール系写本」「ギルギット系写本」「中央アジア系写本」という法華經写本の主要3系統の代表的写本を、「法華經写本シリーズ」に網羅することができた。

池田名誉会長は、写本研究・出版事業の意義について、次のように述べている。①諸写本の比較研究によって法華經の成立、並びに伝播の系譜をたどる、②各地域で出土・保存されている法華經の「異・同」を分析することによって、諸民族や文化の“多様性”に応じて法華經がどのように変化・対応してきたかを知る、③法華經が諸民族の文化形成にどのように寄与してきたかを分析する、④法華經の伝播史から「歴史の教訓」を引き出し、地球上の多様な文化圏の差異に応じて、それぞれの特質を生かしながら、普遍的な人類意識を養う方途をさぐる。

国境、民族、文化などの相違を超えて、多くの人々に信奉されてきた法華經。その平和と共生・共存の思想が、この写本シリーズの刊行を通して世界に、次代に広がりゆくことを願っている。

最後に、インド国立公文書館のムシルル・ハサン館長、インド文化国際アカデミー理事長のロケッシュ・チャンドラ博士、ドイツ・フライブルク大学名誉教授オスカル・フォン・ヒニューバー博士をはじめ、これまで「法華經写本シリーズ」の出版事業にかかわってくださった国内外のインド学仏教学、仏教文献学などの研究者、専門家の諸先生方をはじめすべての関係者の皆様に、厚く御礼申し上げたい。

（はらだ みのる／創価学会会長）